

逆らえない鬼

〜体験版〜

その前日、俺は市場で奇妙な男に呼び止められた。

その男は頭からぼろ布をまとって、地面に風呂敷を敷いてちらほらと商品を置き、自分から声をかけるでもなく、通行人も見えていないかのようにその前を黙々とおりすがっていた。

俺はふとその男が目に入り、広げている商品に目を向けてみたが、妖しげな文様の書いた札が数枚と、片手サイズの立体人形が二、三体並べられ、年期の入った手鏡が並べられているだけの、若干怪しげな雰囲気の店だった。

立ち止まって陳列された商品を眺めていると、座り込んでいた男に声をかけられた。

「お兄さん、これが気に入ったのか？」

俺は別に、とぶつきら棒に返答し、これ以上絡まられると面倒な気配を感じ、その場から立ち去ろうとしたが、男の一言で足を止めた。

「人を自由に操れるセットだよ。興味ないかな？」

興味はある。だが、それが本当に効果があるならば、という話だが。

男は人形一体と手鏡、札を取り出し、この三点で、相手のわずかな細胞組織を採取できれば自在に操れるという、眉唾物の商品の説明をしてきた。

馬鹿らしい仕掛けに、すでに興味を失いかけていた俺は、空返事をして男の言葉を聞いていたが、男はその三点を袋にまとめ、俺に向かって突き出してきた。

「代金はいらぬ。効果があれば、またこの店に来て、それから支払をしてくれてかまわないからな」
そう言って俺に道具を押し付け、男は再び路上に座り込んだ。

こんなものに、効果などあるはずがない。女子供じゃあるまいし、呪いを信じるほど軟弱ではないし、正直押し付けられて迷惑だった。

しかし、給料日前で金欠の俺は市場でほかにめぼしい商品を探り当てることもできず、今日の戦利品はこの怪しげなまじないセットだけとなった。

※

「はあっ、はあ・・・うううっ・・・！っ、爪は立てないで・・・っ」

こいつの弱点である乳首を弄り続けて、二十分ほど経過している。乳首が感じやすいのはわかったが、その感じ方が予想以上に激しいので、最初は俺もビビってしまった、演技かと疑ったが、今のこいつには演技をすることは禁じている。

両胸の乳首をそれぞれの手で弄り、指先でつまんだりこね回したり、上下につま弾いたり、何度も刺激を変えて挑んでみるが、その度にもしろいほど艶っぽい反応を返してくる。

相手の身体は性感帯を長時間廻られ続け、上半身はすっかり小さな汗を浮き立たせ、肌がしっとり汗ばんできている。

それにつれて、こちらにの欲情をさそうような香りが強さを増したような気がして、俺はさらに興奮をそそられた。

「んぐっ・・・！ああ、離しなさ・・・い・・・っ」

指先でつまんで力を入れ、そのまま擦りたててやる。上半身が反りあがるほどビクビクと快感の反応を返し、甘くトロけた声だが、かろうじて反抗の声を出す。

「ふあっ・・・！あっ！ああ、や、やめ、んんんっ！んぐっ、はあ、ああああああ・・・」

少し強めにつまんで激しく指先で擦りたててやると、急に反応が激しくなって上半身を強張らせ始めた。

「ん？どうしたんだ？」

「はああ・・・い、イク、イキそう・・・ですっ・・・」

「何？」

その言葉を聞いて、俺は「ちょっとそれはおかしいのではないか」と思った。

下半身を弄られてイクのは当たり前だが、胸をさわられているだけでイク奴なんて、聞いたことがない。今まで抱いた女で乳房が敏感な女は多くいたが、胸だけの刺激でイク女はいなかった。

「嘘言ってるんじゃないよ。胸さわってるだけでイク奴なんているわけねえだろうが」

そう言いながらも、俺は責める指の動きをやめない。むしろ激しくしてやると、相手は背中を反り始め、まさに絶頂に近い位置にいるような反応を返し始めた。

「あつ！あつ！あああつ！イク、イクんです、私、胸、胸でっ……こんな、嫌……なのにつ……あつ……！イク、あああつ、あ、あ、ううーっ！」

タイミングを合わせて乳首を強く抓んでやると、白い身体が硬直と同時に激しく痙攣し、切れ長の涼しげな目を力いっぱい瞑って歯を食いしばり、体中をブルブルと震わせた。

「んんっ……！ん、ふううっ……」

はあはあと荒い吐息をつきながら身体の緊張を解き、身体をゆっくりと布団に沈め、けだるそうに手足を投げ出した。

綺麗な顔は紅く染まり、切れ長の目を閉じて、いつもつりあがっている眉が垂れ下がっている。

いわゆる「イキ顔」なんだろうか。

こいつが本当に胸でイッたかどうかは定かではないが、この、目の前で無防備にさらされている、どうしようもなく可愛い美貌に俺は釘付けになり、思わずその小さな唇に舌を這わせてしまっていた。

俺は久々に味わう、興奮と喜びで笑い声をあげていた。

なんだこのアイテムは。なんて俺にとつて都合の良い道具なんだ。

これなら、日ごろから憎々しく思っていた上司にも復讐し放題、気に入らない獄卒を降格させることも可能だ。

俺は正直、獄卒には向いていないと薄々感じている。

拷問で亡者を痛めつけるのは嫌いではないが、定時に起きて定時に帰り、面倒くさい縦社会の掟に沿い、拷問以外の仕事は不出来だと、同僚から陰で悪口を言われているのも知っている。

だが、俺の巨軀と、唯一秀でた剛力に、暴力沙汰を懸念して誰も文句を言ってこない。言ってこない代わりに、若干浮いた存在になってしまっている。

気に入らない。

一体俺の何が悪いのか。感情を持っているなら、怒りを感じたらその場で発散するのが当たり前だろう。いちいち我慢するヤツの気が知れない。

だが、そんな愚痴も今日でおしまいだ。

気に入らないやつや髪の毛や身体の一部を採取し、人形にまきつけるか、鏡に向かって強く念じれば、そいつを思うとおりに従わせることができる。

俺の未来が急に開けてきた。

俺を陰で馬鹿にし、鬱屈させていた心を、今こそ発散させて思い知らせる時だ。

男同士でキスをしているのに、嫌悪感は一切なかった。男とやる経験はこれまで何度かあったが、興味本位で突っ込むことしか考えていなかったから、キスどころか同性の身体に愛撫を施すなど、考えもしなかった。

しかし、コイツは別だ。

思っていたよりずっと柔らかい唇の感触を味わいながら、我ながら鼻息が荒いと思う。

「抵抗するな」と命令しているので抵抗はしてこないが、ん、ん、と喉を鳴らして抗議はしてくる。

それすらもなんだか可愛く思えてきて、俺は一度口を離すと、食いつくようにして相手の唇にもう一度口を重ねて、舌を挿しこんで口の中を舐め回す。

ますます相手の抗議するうめき声が大きくなるが、そんなもの構わない。

内頬や上あごに舌先を這わせて、奥にひっこめている舌へ先端を擦りつけたとき、抗議の声に甘い響きがこもったのを確かに聞いた。

俺は一度口を離し、命令する。

「おら、舌を出せ・・・」

すると、相手は小さな口を僅かに開けて、下唇の上に乗せる程度に舌を見せる。その紅い舌を見て何故か俺の興奮はますます高まり、勢いをつけてそこへむしゃぶりついてしまう。

「いっ・・・!!」

すると自分の唇に鋭い痛みが走った。

慌てて身体を起こして自分の口に手を当ててみると、唇から血が流れているのだと理解できた。

俺にいいようにされている相手は、肩でゆっくり息をしながら、恨みがましい視線をこちらに向けている。

その少し開かれた口には、するどい八重歯がのぞいていた。

そうだった、俺たちは歯がするどい。キスをするときはいつも気を付けていることだというのに、つい注意を怠って力強く接触したせいで、口を切ってしまったのだ。幸い傷は浅く、舌で二、三度舐めとると血の流れは止まった。

「もっと舌をだすんだ・・・」

俺の言葉を聞いて、相手がそろりと舌を伸ばしている。僅かに首を左右に揺さぶり、黒髪をバサバサと跳ねさせて目の前の男は精一杯の抵抗を示す。

嫌なのに、俺の言葉どおりの行動をとってしまう焦りが手に取る様にわかり、日ごろの冷静な姿とのギャップに、つい笑みがこぼれてしまう。

「キスするから、お前も気分を出してするんだぞ？」

俺が新たに命令すると、何かを言いたそうにくぐもった声をあげる。言葉を放つことを許して舌をひっこめさせると、思ったよりも弱い声で言った。

「いい加減に、もう、終わらせてください・・・っ」

若干眉を吊り上げて怒気を込めて言ったつもりだったが、それは俺をすくみ上らせるどころか、逆効果しか生まなかった。明らかに欲情して潤んだ瞳に、上気した白い頬、激しく乱された着流しの襟元に、開かれた白い上半身……

俺は再び乳首に指を伸ばし、両方同時に責め始めてやる。

「んううっ……！」

ヤツが首を少しのけぞらせ、感極まったうめき声をあげた。そのまま小さなその突起を抓んだり、ひっぱたり、指先で素早く弾いたりしてやると、ヤツは面白うように上半身をビクビクと痙攣させた。

「ふあっ……はあ、や、やめなさいっ……！」

エロい吐息交じりにヤツが声をあげる。

「なんだ、触られるのは辛いのか？一回イッて、もしかして敏感になったのか？」

「は・・・はい・・・」

一瞬ヤツは口をつぐんで答えを拒否しようとしたが、俺の命令が効いているので、自分の感じたままを吐露してしまうのだ。

そうか、一回イッたから、さらに敏感になっているのか。
じゃあ、もっと激しくしてやらないとな。

俺は乳首を少し強めにつまみ、そのままグニグニと揉み始める。

「んんっ・・・んんっ、んうう・・・っ」

「痛いかな？」

「・・・いえ、痛く・・・ないです・・・」

じゃあ、感じるってことだ。ちょっと激しいぐらいが、こいつは好きなのかもしれぬ。

そのまま限界まで引き延ばして小さな悲鳴をあげさせたり、人差し指の腹で円を描くように上から押しつぶしながら揉んだり、爪の先でピンピン弾いてやったり、多様な責めをしてやった。

「あつ！あああつ！あつ！ぐっ！やめ、はあ、ああつ！」

信じられねえ、乳首だけでこんなに感じるなんて、女でもそうそういねえよな。

掌全体を使って先端を左右に素早く擦ると、ああ、とヤツの身体がのけ反り、愛撫の長さに比例してヤツの吐息も上がってゆく。

「んんんっ！んっ！あああつ！」

「イクときはイクって言え」

「うぐっ！・・・い、イクっ・・・！」

俺はそのまま、さらに激しく手の動きを速めてやる。

「うああつ！やめ、いやだ、あああつ！あつ！あつ！」

ビクビクツ！と激しくヤツの上半身が激しく痙攣し、ゆっくりと敷布団の上に身体を沈み込ませる。

※

「ふあああっ！あっ！あああっ！きもち、いい、はああっ！激し、すぎ、あ、いいっ！」

ふふ、気持ちいいって言われると俄然ヤル気がでるよな。なんだかコイツの上げる声も、さっきより蕩けたカンジになっているような気がする。

このアイテムは、相手の性感まで操ることができるらしいな・・・。

「ほら、もっとよがれ。恥ずかしがるな、もっと気持ちよくなるぞ、ほら、ほら・・・」

言いながら、俺は抜き挿しを一層激しくしてやる。

「あっ！あっ！あっ！あっ！あああああっ！いいっ！き、きもちっ！あああっ！いいっ！はああ、こ、こんな、ああっ！いい・・・っ！」

パンパンと互いの肉のぶつかる音が部屋に響くほど、動きは激しく、素早くなっていた。

ヤツの中はトロトロの熱に溶けていて、俺のナニをこれ以上ないほどに刺激してくれている。俺は必死にこらえていた。

何故なら、ヤツが絶頂した瞬間が一番気持ちいいから、その瞬間に同時に射精しようと思ったからだ。だが、ヤツの中を食うのに夢中で、何度かヤツだけで絶頂らしい愉悦は迎えているらしい。そしてわかったことだが、コイツの中にはいくつかコリコリした固い部分があって、そこを集中的に責めると一気に快感の叫びをあげる。

これがケツの弱点、女のGスポットにあたる部分か？
そうらしいが。こいつはいくつもあるらしい。雑誌には、一つだけでも書いていなかったが、複数あることに俺は少し驚き、大いに喜んだ。

「きもちいいっ！ああっ！やめ、はあっ！はっ！あっ！あっ！」

ヤツの吐息が切羽詰まったものへと変貌してゆく。おそらく絶頂が近いのだ。俺は口の端を上げて笑い、ヤツの身体を引き上げて落とすと同時に、弱点を思いつき突いてやった。

「ああああっ！あああつ、あつ！はああああああ．．．！」

今までの絶頂時よりも輪をかけて激しく絶叫じ、身体もビクビクと激しく痙攣させる。両足をバタつかせ、俺は逃げ出されないように、汗で滑りそうになるひざ裏を掴まえておくのに必死だ。

ケツで迎える絶頂は何度も絶頂の波が訪れるらしく、ヤツは俺を啜えこみながら何度もビクビクと身体を跳ね上げている。

二度目に波を迎えた瞬間を狙って、俺は自分の良くも解き放った。

「うああああっ！熱い、熱いっ・・・気持ち・・・いい・・・！」

熱い、か。しかも気持ちいいとは、随分エロくて嬉しいことを言ってくれるじゃねえか。

俺は女にするようにちゃんと絶頂の波を最後まで迎えさえ、収まるまで揺さぶり続けてやった。

「うっ・・・うう・・・いい・・・はああ・・・」

しかし俺が動いたことによって、再びヤツの身体に火がついてしまったらしい。ビリビリと震えるだけだった内壁が、再びナニを包み込んで締め上げはじめるのだから。

しようがねえな、こいつは。本当に淫乱だ。

「ああ・・・抜け・・・抜いて・・・ください・・・」

しかし、俺は再びつながったまま体勢を変え、今度はヤツの背中を床に寝かせ、俺が上から覆いかぶさる。いわゆる正常位だ。

こうやって上から間近で補佐官様を見ると、やはり息をのむほど色っぽい。イツた直後で身も心もメロメロになっていくせに、まだ抵抗する意思があるらしく、抵抗のつもりか、敷布団を憎い相手のように握り込んでいる。

俺はヤツの腰を抱え込み、一層身体の深みまでナニを突き入れる。

「んぐうっ！」

挿れっぱなしでもう四連続だ。俺の体力はまだまだ持ちそうだが、ヤツがそろそろグロッキーらしい。じゃあ、最後の五発目は盛大に激しくさせてもらおうか。

当然、入れっぱなしの五連続が終わる、というだけの話で、今夜のセックスが終わるとは考えていない。

再び柔らかい唇に舌を這わせて、耳元を舐め回してやる。腰の動きも止めることなく続け、俺は極上の快楽を貪り続けた。

※

まず鏡を見つめながら、俺はつぶやいた。

「欲情しろ」

しかし、鏡の相手に変化はない。

おかしい、鏡の効力がなくなったのか？

「もっと欲情しろ」

しかし、やはり変化はない。元カノにこう命令した時は、膝を地面に崩れさせ、肩を揺らして激しく息を吐いて、明らかに激しい欲情に襲われていたが、鏡の向こうの美形は命令前と変わらず、涼しい顔で巻物を読み続けている。

「立っていられないぐらい欲情するんだ」

そう命令して、そこで初めて変化が現れた。

巻物は両手で広げたまま、閻魔大王様の審判台に、少し身体を寄りかからせたのである。

しかし、これでは単に背中を壁に預けている、誰でもする日常光景だ。

俺は舌打ちし、もう一度命令しようとしたとき、掴んでいた箸で、机の上に置いてある人形を突いてしまった。

すると、鏡の向こうの鬼神が、急に前へたたらを踏んだのである。

本人も驚いているようで、後ろを振り返りながらキョロキョロとあたりを見回している。

『ん？鬼灯くん、どうしたの？』

『いえ、なんでもありません』

そう言って、再び巻物へと視線を落とした。

この人形……

もしかして、こいつは画期的な代物なのではないだろうか？

今度は、人形の胸から下腹部にかけて指の腹でゆっくり、優しく撫でおろしてみる。すると、鏡の向こうの人物は急に身体をくの字に折り、片目を苦悶の表情で曇らせた。

その様子を見て、俺はまた歓喜がわきあがってくるのを明確に感じた。この人形、どうやらあの鬼神とつながっているらしい。

つまり、人形に与えた感覚が、すべてアイツへと反映されるというわけだ。

これはなんておいしい仕組みなんだ。俺はムラムラと悪戯心が湧き上がってくるのを抑えきれず、鼻息を荒くした。

鏡の様子を見ながら筆を手に取り、人形の首元をすすると撫でてやる。

『うっ・・・』

鏡の向こうの鬼神は首を傾げ、身体を硬直させるが、手にした巻物は離さない。

今度は閻魔大王様も気付かなかったようだ。

面白くない。もっと感じさせてやろう。

俺は首元をしつこく筆先で撫で回してやった。

身体は命令で立っていられないほどの発情状態のくせに、時折身体を振るものの、大げさに声をあげたり媚態を見せたりと、顕著な反応は見せようとしない。しかし、鏡で様子をずっと見ていると、最初とは明らかに顔色が変わっていた。

病的に白かった頬がほんのり紅く染まり、目も少々キラキラと潤み始めている。昨夜のコイツの感じている様を思い起こして、俺はますます身体を興奮させた。

首元だけに限らず、筆を胸や脇腹、肩、背中へと滑らせて行く。ん、ん、と小さく呻きながら身体をわずかに振り、手にした巻物もブルブルと震えている。

筆で撫で続けているうちに、人形に変化が表れ始めた。

ツルンとしたセルロイド人形の表面がわずかに隆起し、頭からはアイツにそっくりな尖った耳や、両胸には乳首が現れ、下半身には男のモノが小さく生え始めた。

人形をひっくりかえすと、背中はまだかなカーブを描くようになり、尻の割れ目までできている。まさかとは思ったが、割れ目を少し指先で開いてみると、ケツの穴までご丁寧に出来上がっていた。

人形の造形の変化により、さらに細部へ愛撫できるようになり、俺はさらにしつこく筆で上半身を撫でくりまわした。

「もつともつと欲情するんだぞ・・・」

鏡越しに命令を追加し、筆先で乳首を上下に素早く撫で擦ってやる。

鏡の様子を見ると、巻物を手にしたまま、肘で胸を押さえ、なんとか堪えている様子だが、最初とは明らかに反応は違う。

さすがに隣の閻魔大王様も気づいたらしく、一人で小さく悶え続ける部下に声をかけている。

『鬼灯くん、今日はなんだか様子が変だよ？どつか痛い？』

『な、なんだか小さな虫が、着物の中に、入ったようで・・・気持ちが悪いです、お気になさらないで、ください・・・っ』

お気になされないほど、今の自分の様子がおかしくなっていることに気付いていないのか、コイツは・・・俺は口を手を当てて笑いをこらえた。いや、別にこちらの様子が相手に見えているカンジはない。思いつきり笑えばよいのだ。

俺の筆の動きが止まると、キュッと姿勢を正して、周囲をキョロキョロと伺っている。眉がつりあがって怒りを抱いているのは明らかだが、睨むべき相手はあいにくそこには、いない。

まるで神になったような気分だ。

不意に足裏に筆を這わせると、弾かれたように片足を上げて硬直している。

しかし、両手に広げた巻物は落とさない。

よし、いいだろう。

俺が勝手に決めたゲームだが、その巻物を落とすまで、この悪戯は続けてやる。

大事な裁判中に、身体をギンギンに発情させて身体中を謎の筆にまさぐられる快感に、どこまで耐えられるのか、全く見ものだ。

俺は昨日使用したサラダ油を用意し、筆先に浸して再び人形に毛先を這わせ始めた。

※

俺はニヤニヤが止められない。

油を含んだヌルヌルの筆で背中中の窪みを上から下へ撫でおろしてやると、鏡の向こうの鬼神は明らかにおかしい仕草を見せている。

両手に広げた巻物はなんとか落とさずにかんばっているが、耐えるために力を込めすぎて巻物を破いても、コイツの負けだ。

そうだ、今俺は勝手にコイツに一方的な勝負を挑んでいる。

今コイツが両手に広げている巻物を取り落すか、破るかすれば、コイツの負け。

俺の勝ちとなった暁には、当然俺の欲望を満たすための道具になってもらう。

そう考えた途端、俺は昨夜の情事を思い起こしていた。

絡みつくような淡い花の香りに、しっとりとして最高の手触りをした白い肌、快楽で上げる声は裏返って可愛らしく、突っ込んだ身体の中は、生半可なオナホなんかじゃ太刀打ちできない、鳥肌が立つほどの快感を俺に与えてくれた。

抜かずに五連発射精してやったが、その気になれば、十連発はイケたかもしれない。

俺は鬼の中でも絶倫な方だと思う。

付き合う女は、同じ鬼である程度体力があるにも関わらず、俺が完全に満足する前にへたばってしまう。

しかし、コイツは最後まで俺についてくれた。
セックスの相手としては理想的な身体だった。

鏡の向こうの涼しげな顔が、昨夜は俺に抱かれて甘くトロけていた・・・
俺はその優越感と思い起こした記憶で、下半身が熱くなってしまふのを感じた。

「もっともっと気持ちよくしてやるからな・・・」

鏡がヤツの綺麗な顔に寄り、その造形をこちらに伝えているが、いつもは病的なまでに白い頬がほんのり紅く上気し、筆が身体を撫でると唇を噛み、首をブルル、と小さく震えさせている。

俺は筆先を首元でヌルヌルと撫で回し、弱点の耳に着手した。

ゆうべ自分から耳は弱い、と白状した部分だ。さすがに効いたらしく、ビク、と首を反射的に傾け、撫でられた耳を肩にくっつけている。

片方だけじゃ、やっぱり不公平だよな。反対の耳も、撫で回してやる。

鏡の向こうの美形が、首を左右に振ってオロオロとする様は、誰がみても滑稽な様子だった。

しかし残念ながら、閻魔大王様も亡者も、亡者を抱えた二人の獄卒も、ヤツの変異に気付いていない。

・・・いや、一人の獄卒が気付いている。

コイツは日ごろからこの鬼神の仕事ぶりを我が事のように自慢し、尊敬している獄卒だ。

なんだか言う言葉に熱がこもっていて、そのケでもあるのではないか、そういえば、又キアンケートとったとき、コイツ居たな・・・と陰ながら若干気持ち悪く思っていた獄卒だったが、やはりファンであるだけあって、上司の変化には目ざとい。

その時、俺はちよつとコイツにいい思いをさせてやろうと思いついた。

筆でことさら耳と首元をヌルヌルと撫で回し、もうどちらに首を傾けても一方的に感じさせられてしまっている鬼神は、どうすることもできず黒髪をフルフルと左右に揺らすだけになっていた。

「亡者の左側にいる獄卒を見つめろ」

鏡に向かってそう命令する。

ゆっくりとヤツの首が動き、亡者をとりおさえている部下に顔を向けた。

欲情で高まり、上気して紅くなつた恥ずかしい顔を人へ見せるなんて、屈辱極まりないだろう。

首を傾けた鏡の向こうの鬼神は、明らかに戸惑っていて、同時に悔しさを感じているのか、唇を噛んでいる。

そして、上司に心酔している獄卒がタイミングよくエロ上司と目を合わせた。

口を横一文字にキュッと引き結び、頬をほんのり紅く染めて目を潤ませている鬼神を見て、コイツはどう思っただろうなあ。

俺が眺めていると、そいつは見てはいけないものを見てしまったかのように、弾かれたかのように首を回して視線を逸らせた。

なんだ、面白くねえ。

だが、いつもと雰囲気の違う上司に感じる物があつたのか、獄卒も若干顔を赤くして困惑してしまっている。

これから、もっと鬼神様の恥ずかしい表情を見ることができろぞ・・・俺に感謝しろ。

首は部下に向けたままで、俺はさらに筆を身体の下へ徐々に下ろしてゆく。

鎖骨を撫で、今は胸をヌラヌラと油を含んだ筆で撫で回しているが、悪戯を開始してから急に精巧な作りになった人形には、ヤツの裸の胸の形が細部まで再現されている。

当然乳首も浮き上がっていて、しかも立った状態で形が現れている。

筆先でサワリと片方の乳首を撫でてやると、ヤツは身体を一瞬ビクつかせて、反射的に自分の肘を、撫でられた方の胸へと押し付けた。俺は構わず、さらに押さえつけられている乳首を筆先で撫でまし、コイツを追い詰めてゆく。

時折筆をベツタリと押し付けてその場でこね回してヌルヌルの感触を堪能させたり、触れるか触れないかの距離で筆先を回して責めてやったりする。

さすがにキツいらしく、ヤツの身体は少しブルブルと震えが目立ち、眉間に皺を寄せて片目を強く瞑ったり、唇をかみしめたりしている。

こうでもしないと、声が出てしまうのだろう。いやらしい声が。

立たないほど発情している上に、性感帯をしつこく弄り回されるのはどれだけ気持ちがいのだろうか？

昨夜犯したときは、信じられない事に胸で絶頂していたな・・・コイツ。

今回も、イクまで筆で弄ってやるか？

この鏡と人形を使えば、不可能なことではない。

仕事中にイクなんて、なんて淫らで不謹慎な男なのだ。こんな淫乱が地獄の補佐官だなんて、声をあげて笑いたくなってくる。

俺は両胸を交互に筆でヌルヌルと撫で回し、思いつく限りの動きでヤツの胸を廻り倒した。筆先を上下に素早く撫で倒し、油の滑りを利用してねっとり絡みつくようにこね回す。

ブルル、と明らかに鏡の向こうのヤツの身体が変化をきたし、巻物を両手に持ちながら、両肘を胸に強く押し当てている。

誰の目から見ても明らかに奇妙な仕草に、鬼神ファンの獄卒だけでなく、もう一人の獄卒も気が付いたようだ。

「そいつにも顔を見せてやれ」

俺の命令が発せられると、ヤツの首がフイ、ともう一方の獄卒へと向けられる。

先ほどよりも顔が欲情で紅くなり、瞳が潤み始めた上司の表情を見て、獄卒は固まっていた。

ファンの獄卒は、見てはいけないと無意識に感じて顔をそむけているものの、見たい衝動に負けて上司の顔を何度もチラ見している。

こりや今夜のオカズ決定だな。

お前らが妄想でしか抱けないヤツを、俺は昨日散々自由にしたんだけどな。ふふ。

筆の動きをさらに激しくし、胸の先つちよをいじくり倒す。よほど感じるのか、今度は少し猫背になり、巻物を持ったまま上半身を縮こまらせた。

巻物が顔を隠してしまい、顔を拝めなくなってしまった。何も事情を知らないヤツから見たら、巻物の文字が読みづらくて目を近づけただけだと思ふかもしれない。まさか仕事中に立ってられないほど欲情しているなんて、誰も思いはしないだろう。

それにしても、裁判中、コイツは閻魔大王様の隣に立っているだけで、何もしないのか？

巻物を広げて横に突っ立っているだけで高給をもらえるなんて、なんてヌルい仕事してんだ。こっちは汗水たらして亡者を拷問しているのに……

「もっと胸で感じるんだ。イっても構わないぞ……」

新たに命令を吹き込み、鏡を見る。

鏡は巻物の向こうの顔を映し出したが、巻物に隠れているのをいいことに、快感ですっかり相好を崩していた。

紅くなつた唇を半開きにして息を切らせ、頬は桃色に染まり、耳まで紅くなっている。凜々しい瞳は快感でふやけ、ウルウルと涙をたたえて長い睫毛にひっかかっていた。いつもはつりあがっている短い眉も、今はふにや、とハの字に垂れ下がり、とんでもないエロ顔になってしまっている。

その顔を見て俺は一瞬硬直し、そして次の瞬間には爆笑してしまった。
堪らない、こいつはめっちゃくちゃエロい。

この顔、写メできねえかな？俺はスマホを取り出し、カメラを向けて鏡に向かってシャッターを切る。
画面を見ると、ちゃんと鏡越しでも撮れていた。静止画になると、ますますエロく見える。

俺は鏡を床の上に置き、左手にスマホ、右手で筆を握って人形を撫で回し続けた。

筆が人形の身体をヌルヌルと動かすたびに、鏡の向こうの整った顔立ちが甘く崩れてゆく。

ビクンと細顎を痙攣させて、両目を瞑り、声が出ないように必死に口を引き結ぶ姿は、いじらしすぎて、可愛すぎて、とにかく俺の興奮をそそる。

そろそろ、仕事できないほどに激しく乱れさせてやろう。

自分の毎日立つ仕事場で、コイツが恥をさらすところを存分に周囲へみせつけてやるのだ。

「さあ、もっと身体に感じる感触に集中して、快樂を受け入れるんだ・・・」

鏡に向かって新たな命令を繰り返してゆく。

すると鏡の向こうの鬼神はビクリと身体を揺らし、ついで猫背をさらに縮め、もはや前かがみと言ってよいほどの体勢になってしまう。

※

『ふふ、また何かイタズラされてるみたいだね。ここ、責められてるの？』

フェラの動きをいったん止めて、白澤が後ろに挿し入れた指を上下に動かしている。するとヤツはさらに、あああ、と呻いて喘ぎ、身体中をビクビクと激しく痙攣させた。

『それダメ、ダメですっ……！今は、触らないでっ……！動かすなっ……！』

架空の異物で最も敏感な部分を激しく擦られ、現実の感覚でも同じ性感帯を擦られる。二重の快感が同時に襲い、ヤツの乱れようも、いよいよ激しくなっゆく。

『どんな感じで後ろ責められてんの？ゆっくり？激しい？』

『……っ！』

白澤の言葉に絶句し、ヤツは顔を真っ赤にして唇をかむ。

それにしても、こいつ結構Sだな。

ドSの補佐官を責める、温厚と言われる神獣の裏の顔に俺はなんとも言えない気持ちになった。こいつはセックスの時はいつもこんな調子なのか？女相手にもこんなドS発言して、とっかえひっかえして・・・

その反面、俺たちみたいな非モテは女に仕えているかの如く扱い、結局けんもほろろにフラれてしまう。ムカついてきた。

おとなしく犯られているコイツもコイツだ。いつものビククリするほどの威厳はどこへ行った。それじゃ、そこらの娼婦と変わらねえぞ。

だったら娼婦らしく、相手、つまり俺を悦ばせるようにしなきゃな。俺は鏡に向かって命じた。

「白澤よりも、俺に刺激されている方が感じるかと宣言しろ」

そう言って人形のケツに差し込んだ爪楊枝を上下に激しく抜き挿しする。

『あつ・・・あああああつ！いい、いいっ・・・ですっ！あなたにされているよりも、感じ・・・ますっ・・・はぐうっ！』

身体中をビクビクと痙攣させ、派手な声をあげて悶え狂う。

黒髪を振り乱して快楽という苦悶にゆがむ表情は、本当にたまらなくそそのる。

『それって本気？それとも、言わされてる？』

白澤が確信をついたところを聞く。なんだかコイツにはいちいち俺の行動が見透かされているような気がして気分が悪い。

もっともっと悔しい思いをさせてやろう。

『あっ・・・さ、触らないでっ・・・！あなたに触られても、感じません・・・っ』

『ふーん、こんな事されても？』

すると白澤は再びフェラをはじめめる。

『んあああっ・・・！か、感じませ・・・っそれ、やめてっ・・・』

俺の命令通りの言葉を口にしながら、なんだか余計に白澤の気持ちに火をつけているような気がする。

ヤツは今、鬼神の大事な部分を口に咥えてせわしなく頭を動かし、舌も使っているのか、白い手足が我慢できないとばかりに痙攣し、空を掻く。

『あああ・・・いい、んんっ！イク、イってしまっ・・・！っっ・・・！』

ヤツの身体が激しく痙攣し、ビクリと跳ね上がると白澤は股倉から顔をあげ、手で激しくヤツのモノを扱き始めた。

するとその直後、先端から勢いよく透明の液体がビュッと飛び出し、噴射は五を数えるほど長く続き、終わった。

何だ？小便か？

それにしても、色は透明で量も少ない。

精液でもない、謎の液体を吐き出したヤツの表情には、僅かな疲労の色と、快感に浸りきったトロけた顔が出来上がっていた。

『気持ちよかったろ？潮吹き・・・。お前これに弱いもんね。ねえ、誰かさんもこれ見てた？』

潮吹き？確かに、男でも女のように潮を吹くことがあるとは聞いたことはあるが、まさか目の前で見たあれが、そうだっていうのか？

いや、それよりも白澤が再び挑発のような言葉を投げかけてくる。いや、「ような」ではなく、すでに挑発だ。

自分の方が、鬼神の身体のことを知っている、とでも言いたげな勝ち誇った表情に、俺は再び苛立ちを積み重ねた。

この鏡を使って、白澤は操れないのか？くそっ、本当に腹の立つ・・・！

「いつまでも浸ってないで、白澤を殴れ！」

俺は苛立ちを補佐官に向け、大声で命令した。

『あいだっ！』

命令どおりヤツは白澤の頭を拳でふつとばし、身体の上から引きはがした。

絶頂直後で息を切らせながらでありながら、鬼神の剛力は強烈らしい。白澤は壁に身体を打ち付け、キユウと目をまわしていた。

『なんてこと・・・するんですか・・・馬鹿・・・』

執務室に常備されているティッシュ箱を手に取り、着物の上にかかったエロい液体をふき取りながら鬼神が愚痴る。

白澤はいまだ目を回して壁に背中を持たれかけさせている。ザマーミロだ。

しかし、まだ快感の余韻が残っているらしく、ヤツは仰向けに倒れながら億劫な手つきで着物の汚れを拭いている。

男の潮吹きというのは聞いたことがあるが、実際見たのは初めてだ。精液を出し終わった後にさらに激しくモノを抜くと、限界を超えた瞬間が訪れて精子の混ざっていない透明の汁を出すらしい。その気持ちよさと言えば筆舌に尽くしがたいという話だが、いったばかりのモノは敏感になって正直触られるのもうとおしい。

目の前でびびっている白澤は、まるで今まで何度もヤツに潮吹きをさせたかのような言い方だったが、そこまでこの鬼神の身体を知り尽くしているということか。

気に入らない・・・

俺は鏡をぐつとにぎりしめ、モヤモヤとした気分をかかえながら、次の展開を傍観し続けた。

白澤とヤツの動向を逐一見物していたが、その後白澤は復活し、なんとヤツとセックスを始めた。ヤツは終始戸惑い、困惑し、停止を求める言葉を吐いていたが、薄桃に火照った身体が裏切るらしく、なんだかんだ言って白澤の愛撫を受け入れていた。

そして挿入の段階に入り、俺は目を見開いた。

白澤がヤツの両足を折り曲げ、秘部を露わにすると、そこへモノをあてがって一気に突き入れたのだ。一方、ヤツは少し苦悶の表情を続けていたが、動かれる段階になると甘い嬌声をあげ、腰の動きに翻弄されるままエロい反応を返している。

ときおり白澤がヤツに口づけを施していて、最初は首を振って拒絶していた態度も、今では互いに舌を絡めた濃厚なものになり替わっていた。

『あつ、あつ、あああつ！はああつ・・・もつと、ゆっくりつ・・・！』

ヤツの身体が上へ上へと押し上げられるほどの激しい動きを繰り返し、ヤツが切羽詰まった嬌声をあげ、体中をヒクヒクと痙攣したかと思うと、熱そうな吐息と共に身体を一気に弛緩させた。

どうやらイッたらしい。

首を大きく逸らせているのでこの鏡の角度からは見えない。ヤツの顔の前に回り込んで見てみると、長い睫毛を伏せて、普段はつりあがっている短い眉をハの字に垂れ下げ、それはもうエロ可愛い表情が出来上がっていた。

『これでスッキリした？治療完了・・・っ』

若干興奮で息を乱れさせ、白澤がヤツの体内から身体を引き抜く。すると、ヤツのケツの入り口から、トロトロと白い精液が零れ落ちていた。

こいつ、思う存分中出ししやがって・・・

俺も昨夜、散々こいつに中出しはしたが、他人にされている場面をみると無性に腹が立ってきた。子供のような怒りがこみ上げ、まるで自分の所有物を荒らされたかのような気分だ。

「おい補佐官。神獣に犯されて中出しされてんぞ」

これは命令ではなく、ただのおれの悪態だ。当然、鏡の向こうのヤツにはなんの反応もない。開いていた足を閉じ、再びティッシュを使って残滓を拭こうとしたところで、白澤に箱を奪われ、俺がする、断る、の応酬を繰り返した。

仲がよろしいことで・・・

俺は半ばからかうように鏡を眺めていたが、心は実際、穏やかではなかった。

それよりなにより、一番気に食わなかったことがある。

俺と初めてつながるとき、こいつの身体は中々俺を受け入れず、油を使って潤滑油の代わりにして、ようやく挿入の事なきを得たのだが、白澤とのセックスでは、なんの用具も使わず、容易く侵入させていたことだ。

それだけ、ヤツは白澤に心を許しているのだろうか。それとも、身体の相性が良いだけなのだろうか。

それにしても、希代のイケメン同士がこんな関係にあつて、人目（俺一人だが）もはばからず快樂に耽るとは・・・

これは良いネタができた。

もし週刊誌などにばらまけば、俺には膨大な臨時収入が入ることだろう。

鏡から目を離さず、セックスの最中は邪魔をすることもせず、ただただいろいろな角度から写メしてや
った。

これで、鏡と人形以外にヤツを自由にできるネタが増えた。

二人のセックスを見ていて、一度抜いたはずの俺の身体が再び熱を持ち始めている。

普段男同士のセックスなんて見せられたら、気持ち悪くて吐いていたかもしれないが、コイツらのはなんだか清廉さが感じられて嫌悪感が湧き上がらなかった。

次の行動に移すべく、俺は痛む身体を立ち上げ、軽く体操をする。先ほどとは段違いに体力と傷が回復している。

何故だ？普段なら、三日は絶対安静、下手すりゃ入院と自分でもわかっているような状態だったというのに。

まさか、これもこのアイテムの仕業か？
俺にとつてはいいことづくめだ。
とりあえず、人形と鏡を懐にいれ、俺は自室を後にした。

※

「おら、胸とアソコ、同時にイクか？」

「お、お断わり・・・します・・・っ！」

しかし、ヤツに拒否権はない。俺はカチカチに尖った乳首を爪でひっかけながら、少し激しめに両足のモノを上下に擦りまわした。

「はあああっ！やっ！ああああっ！いやだっ！・・・っ！」

ヤツの身体が硬直し、今までにない勢いで先端から精液が飛んだ。鏡の真ん中あたりに付着し、ゆつくと垂れ落ちる間に、鏡のくもりが取り除かれ、淫蕩にトロけたヤツの表情が映された。

顔が見えないことを良いことに、なんてエロい顔をしてんだ、コイツ。

眉も目じりも垂れさせて、口をだらしなく開いて長い睫毛を瞬かせ、吸い込まれそうな黒瞳は快楽で濁っている。

下半身はイッたが、胸はどうだったのだろうか？俺は再び乳首に爪をひっかけると、未だに硬い感触がある。残念ながら、上半身下半身同時絶頂ではなかったようだ。

それなら、上手く同時にイクまで繰り返すまでだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

ガランと誰もいなくなった浴場に、補佐官様の喘ぎ声が響き渡っている。

一体何度射精させ、胸でイカせただろう。

今はタオルを泡立たせ、ヌルヌルになった泡まみれで、縦横左右にヤツのナニを擦り洗いしまくっている。グシュグシュと音を立てて柔らかいタオルの塊で先だけを出してナニを包み、めちやくちやに揉み込んでやるのだ。

「んんうっ！これ、やめっ・・・！」

言い終わらない内に、ヤツは射精して絶頂を迎えた。

暖かいヌルヌルのに包まれながら愛撫され、性感を高められる感覚はたまらないらしく、ヤツは俺の膝の上でのた打ち回り、あっけなく何度も絶頂した。

目標にしていた手桶いっぱいにはまだ到達してないが、底が見えなくなるほどには十分溜まっている。その広くなだらかな背中にも手を滑らせ、下から上へ撫でてやると、石鹸のぬめりも手伝って、実にスムーズに肩甲骨の間まで一気に撫で上げることができる。

「はああ・・・」

媚薬風呂に入れられ、ローションに似た石鹼のヌメリで触れられ、さらに俺に触れると感じる身体になってしまったのだ。

もう幾度ヤツが絶頂したのか知る由もないが、本番はまだまだこれからだ……。

大きく脚を開かれた中心、その真下で、俺の猛ったイチモツがさつきから浮き上がったヤツの尻を擦っている。時折わざと尻の間に挟むように動いたりして、入り口を感じさせていたから、身体の中は侵入してほしくてたまらない状態だろう。

俺に散々イカされまくって、グツタリとしているヤツの身体を引き寄せ、ひざ裏に両手を当てて持ち上げる。

「っ……！や、やめ、な、さいっ！」

これからされることを予期して、ヤツが急に目を覚ましたように身体をバタつかせ、俺の行動を阻もうとしている。

そんな事をして無駄だというのに、全く学習しないヤツだ……。そう思いながらも、俺の顔のニヤケは止まらない。

この大浴場という日常で、非日常の快楽を味わえるという快感は思った以上に楽しい。

俺のナニの先端がヤツの入り口にピッタリと当てられると、それだけでヤツはブルブルと身体を震わせた。

「はああ・・・！こ、こんなこと、許され、ま、せんっ・・・！」

そう言うが、お前の身体はこの先の展開を待ち望んでいるようだぞ？尻に刺激を与えた瞬間、両足のモノも乳首も反応を返した。

膝裏から手を離し、太腿の上に座らせると、ナニの先端が入り口をグイ、と突き上げ、その感触だけでヤツが背筋を震わせる。

「おら、そのまま腰を落とせ・・・」

俺は両手をヤツの腰に回し、そのまま下へ落とそうとした。

「んんっ！誰がっ・・・！」

だが、否定の言葉も無駄に終わる。俺に「腰を落とせ」と命令されたのだから、ヤツはそのまま素直に腰を落とした。

「ああああっ・・・！」

石鹸のヌメリも手伝って、ズブズブとヤツの中に俺のナニがゆっくりと挿ってゆく。身体の内を荒らされる感覚がたまらないのか、何かさがる物を探して手を泳がせ、シャワーを手にするとそれを硬く握りしめて、激感に耐えた。

少しづつ下がっていた身体もようやく止まり、根元までヤツの中に俺のナニが埋没する。うーん、ため息がでそうなほど気持ちいい。

初めて交わったときは、動かないでケツを打っ叩いただけで、射精したんだっけな。それを思い出し、俺は面白いことを考えた。

異物を飲み込んだ圧迫感と快感に、はあはあと肩で息をしているヤツの耳元で、俺は囁いてやる。

「そのシャワーの先を、自分のモノの前にあてがうんだ・・・」

頭の回転が速いいつものヤツならば、その結果がすぐに予測できただろう。しかし、今は体力の限界まで射精させられ、男のモノまで突っ込まれて、気持ちよさが身体中を渦巻きまくっているところだ。まともにも思考しろという方が無理な相談だろうな・・・。

ヤツは言われた通り、シャワーのヘッド部分を自分のモノの前に垂らす。そして、俺はシャワーコックを捻ってやった。

「んんっ！あああっ！ああああ！」

幾筋もの熱い飛沫が一斉に超敏感なヤツのモノに打ち付けられ、補佐官様はたまらず快感の絶叫をあげた。タオルで磨かれ、泡まみれになったヤツの股間が泡から姿を現し、シャワーの飛沫をまともに受け続けている。

すぐにシャワーの方向を変えて快感から逃れようとしたが、俺が口で制止すると、そのままの姿勢を保ち続けた。

自分でシャワーを握り、それを自分の急所に当ててヨがるなんて、オナニーに違いないじゃないか。なんて恥ずかしいヤツなんだ。エロいぞ。俺は自分のスマホが防水じゃない事を悔やんだ。

「うううっ！これ、はああああ！たまらない、も、もう、止めて、くだ、さ、あ、あああああっ！」

哀願の言葉の最中でも、激しく射精絶頂する。エロいなあ。

さらに良いことに、コイツが気持ちよくなると中の感触もさらに気持ちよくなってくるのだ。

俺は動いていないが、ヤツの体内はキュウキュウと俺を強くしめつけ、まるで抜くように蠕動し、涎が出そうな快感を俺に与えている。

「おらおら、しっかりシャワーをあびとけよ？」

そう言って釘を差すと、俺は腰を使って上下に動き始めた。

※

(くっ、この……っ……身体に先ほどから妙な感覚がっ……！うう、我慢しないと……！)

冷静な表情からはくみ取れない、実に焦った声だった。
ちゃんと感じてくれているな、よしよし……。

『……で、僕のところには明らかにおかしな打撲で店に薬を取りに来る子とかいるねえ。理由聞いても、転んだとか、自分で打ったとか、みえみえな答えするの。僕は医者だから、そんなのすぐわかっちゃうのにねえ』

『なるほど。鬼灯様も、暴力を受けた獄卒や鬼の様子などを見たことはありますか？』

『はい、地獄の仕事は、ほとんどが荒事なので打ち身、打撲、切り傷、骨折は日常茶飯事……』

そこで筆を下半身におろし、両足の間をさわさわと撫で回した。

『っ……です、獄卒同士の傷か、仕事上で……ついた傷か……っ、判別がつかない事は、あ、あります……』

何度も言葉を詰まらせ、明らかに不自然な物言いになっている。テーブルの下の脚に目をやると、女のように両足をとじ合わせ、草履の間からのぞく足指をピクピクと動かしている。

『っ、基本、現場の仕事は現場監督に任せています。私もできるかぎり視察にはっ……うう、行っているつもりですが、全てを把握するのは……やはりっ……！限界が、あります……』

言い切って、口からふうーっと息を吐いた。色がついていたら桃色だろうな。

結構激しく両足の間を責めてやったのに、なかなか頑張るじゃねえか。でも、さすがに鉄面皮は貫けなくなっただようだ。

いよいよ頬が紅らんで、鋭い目元も気持ちよさでちよっと緩んでしまっている。

「鬼灯様辛そうなんですけど？」

「運営、気付いてやれよ」

「でもなんか色っぽい」

「なんだ、とびっこでもしこまれてんのか？ w w」

「↑やめろ、ゲスい発言」

動画上ではヤツの有様を巡ってちよつとした諍いが始まりかけている。

しかし、「どびっこを仕込まれている」、というのはいいところを突いている。

リモコンバイブよりも、強烈なものを俺は持っているんだよな……。

俺は一本の筆にローションをつけると、再び人形の身体にはい回らせた。

今度は胸や下半身だけに特定せず、体中を縦横無尽に撫で回して、人形の身体中をローションまみれにする勢いで、首元、胸、脇のした、背中、腰、太腿、膝、足指、内腿に両足の間……

とにかくしつこく廻りまくった。

会話から外されているので発言しなくてすんでいるが、ヤツの様子は明らかにおかしかった。

背筋を時折ビクビクと痙攣させ、首を左右に振り、テーブルの下でせわしく脚を組み替えている。

テーブルによりかかるフリをして自分の腕で胸を押さえ、口も若干開き気味で明らかにエロくなっている。

(あっ……さ、触るなっ……あっ！ううっ……！背中、背中を何か舐め回して……あああ、う、動いてっ……うんっ！)

見た目ではわかっている俺でなければわからない程度の反応だが、心の中では可愛いぐらい焦りまくっている。

さらに筆を二本に増やし、責める手を変えると、ヤツの心の反応が大きくなった。

（あああああつ・・・こ、これは、舐めまわされている・・・？んんっ！そこは感じる、だめ、い、意識がもっていかれる、あああああつ！？今度は足の指がっ・・・！はああ・・・我慢できない・・・）

我慢できないなら、いっそデカイ声で喘いでみる。俺とセックスしたときのように、あんあん声をあげて、視聴者に見せつけてやれ。

顔のニヤケが止まらない。俺の身体もだんだんと熱を帯び始め、下半身が高揚してきた。もうちよつとヤツを責めてからオナニーに入ろう。

二本の筆でヌルヌルとヤツの身体中を責めたて、身体の性感をどんどん高めてやるのだ。

「鬼灯様体調悪そうですよ？」

「大丈夫ですか？トイレですか？www」

「鬼インフル？みんな逃げろ！」

「貴重な鬼灯様の赤ら顔、みんな拝め！」

馬鹿な視聴者たちは、ヤツの変化が「体調が悪い」としかうけとっていないらしい。まあ、生放送の最中に発情するヤツなんてまずいないからな。

じゃあ、さらに鬼神様を責めたててやるか……。

見ると、人形の両足の間には小さなモノが飛び出し、後ろは完全に尻の形の割れ目が出来上がっている。俺は一本の筆を両足の間のモノに、もう一本を尻の割れ目に食い込ませて上下に擦った。

『あ……っ』

ヒクヒクとヤツの口が痙攣し、確かに我慢できなかつた声がひねり出された。その後も何か喘ぎ声をあげているようだが、マイクでは拾いきれていないらしい。

(くっ、ああああっ……た、たまらない、身体が感じすぎて……、こんなっ、真面目な、討論の、場だというのにっ……なんてはしたない……！でも、身体が、熱い……！そこ、感じすぎです、はあああ……！)

気丈なヤツでも、さすがにこれは効くか。しかし、感度20倍でこの責めだというのに、まだ乱れずに見た目は至って平静を保っているのには感心する。不自然な動向は抑えきれないようだが……

「色っぽいです、鬼灯様ww」

「どうしたんですか？」

「体調不良？ スタッフ、なんとかして！」

「ちよつと変だよな」

「なんだ」

そこで俺は生放送の入場者数に目を向けた。

ヤツが「エロい」と言われ始めてから、飛躍的に上がっているのだ。

お堅い討論番組だから最初の入場者数は悲しいものだったが、今では同時に放送されている他の番組の中でも三番、四番を争う伸び数だ。

皆、エロい補佐官様をそんなにみたいか？ 体調不良だとコメは言っているが、内心では明らかにエロい鬼神様の姿を見たくて押し寄せているのだ。

それならば、俺は期待に応えなくてはならない。

もつともつと激しく、生放送中に事故が起こるほど、激しくコイツを身悶えさせてやるのだ。

ヌルヌルの筆先で小さな人形のモノをこね回し、尻の割れ目には精巧に再現されたケツの穴を執拗に上下へ撫で続け、時折挿入まで試みてぐい、と筆を押し付ける。

すると、伸びたヤツの背筋が不自然に痙攣し、一瞬だが細顎が上がって黒髪がバサ、と揺れる。

コイツは顎のラインが本当に美しい。横顔が美しい者は本当に美形な証拠だと言うが、それならばコイツの右に出る者はいない。

長い睫毛がピクピクと震え、必死で快感を堪えている。

『どうされました？鬼灯様？』

ようやくヤツの異変に気付いたアナウンサーが気遣いの声をかける。

『いえ、なんでもありません、少し、身体が・・・痒くて・・・』

『生放送で緊張してんの？キモが小さいヤツは、ちよつとしたストレスで身体が痒くなっちゃうんだよね』

そこで白澤がいらぬチャチャを入れ、場を和ませてしまう。

『確かに生放送はされていますが、我々意外に、このスタジオには9人しかいませんからね。これが全国に広まっているという実感はありませんなあ』

『ですから鬼灯様も、緊張せずに我々だけで意見を交換しあっているだけだと思って気楽にいきましょう』

評論家の二人も援護射撃をし、この場からエロい雰囲気を取り去っていってしまう。

「ええ！？鬼灯様が緊張！？」

「案外かわいいなw」

「結構気が小さいんですねw」

「そのギャップが・・・いい・・・！」

「さっきの鬼灯様、いただきました！」

コメントもなんだか和んだカンジになってしまっている。これは面白くない。

俺はもう少し先にするつもりだった予定を繰り上げ、筆の反対側をケツに押し当て、強く押した。

『うああっ！』

ガタツ、とテーブルが激しく動き、ヤツの上半体がテーブルに覆いかぶさる。

『はっ・・・うう・・・うぐうっ・・・っ』

資料がバサバサと落ちるのにも構わず、ヤツはテーブルにへばりついて苦悶の表情で身体をヒクつかせる。

「どどどど、どうした!？」

「鬼灯様！何があっただんですか!？」

「そんなにトイレ我慢してたんですか!？w」

「ふざけた意見空気読め」

「っ、辛そうです・・・が・・・」

続きは製品版でお楽しみください。

